パネルディスカッション

【東京会場】

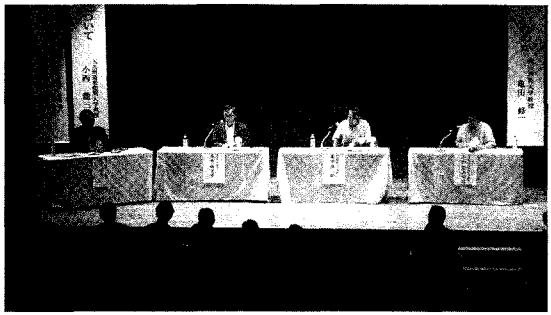

写真7　パネルディスカッション東京会場

コーディネーター

佐藤　信（さとう　まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学助教授を経て、一九九六年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は日本古代史。文学博士。

パネラー

荒木　敏夫（あらき　としお）

専修大学教授。

亀田　修一（かめだ　しゅういち）

岡山理科大学教授。

小西　龍三郎（こにし　りゅうざぶろう）

元九州造形短期大学教授。

佐藤：三人の先生方の講演をずっと熱心に聞かせていただきまして、大変充実した思いを私もしております。鞠智城という古代の研究テーマが、もう止めども尽きないいろいろなテーマを提供してくれて、日本の古代史を大変豊かに描いてくれるなということを、改めて実感いたしました。

三人の先生方のお話を聞いて三つのテーマを、私のほうで考えてみました。第一番目のテーマは、六六三年の白村江の戦いの直後に、おそらく鞠智城が、大野城や金田城とほぼ同時期に築かれたということは、ほぼ説が動かないかと思いますが、それを六九八年、『続日本紀』に初めて鞠智城が見える時に、三〇年経ち、おそらく修理も必要になるし、あるいはどういう機能が変わったかということもそれとつながるかも知れません。それは、中央政府の命令で、大宰府をして「繕治せしむとありますが、これが亀田先生のお話にありましたけれども、単純な小修理なのか、もっと根本的な変化なのか。それは例えば、小西先生の話でもありました掘立柱建物から礎石建物に変わるようなことと対応するのかどうか。そういったことがどういう意味を持つかということが、大きな問題点としてあるかと思います。

写真8　佐藤信氏

そして、それは同時に、荒木先生がお話された、中大兄が大王代行である時に鞠智城を築いたというお話がありましたが、それが六九八年の繕治の時にどうなったのかということも含めて、律令国家にとって鞠智城がどういう意義を持つかということが話題になるのかなと思います。これは発掘調査の成果や建築史の成果ともリンクすると思いますので、鼓の鞠智城の六個々の八年

の全治の評価をめぐるお話を一つのテーマとして考えました。

そして二つ目は、若干重なるのですが、律令国家にとって、鞠智城がどういう意味を持ったかということです。これは繕治の意義をどう歴史的に理解するかということも含めてということになります。それから、荒木先生から後の時代の鞠智城の鳴動についてのお話があったかと思いますが、そういったことも含めて、律令国家にとっての鞠智城の意味についてを、二番目にテーマとしたいと思います。

そして三つ目は、東アジアの中での鞠智城ということが、やはり三人の先生方のお話の中でもあったかなと思います。もちろん白村江の敗戦との関係もあります。あるいは、百済系の技術、百済系の瓦の問題、あるいは八角形の建物や貯水池も朝鮮半島の二聖山城の遺構と関係しますが、渡来人がどのように築城に関わったか。渡来人がいなければ、おそらく築城もできなかったのではないかと、それに近いお話が亀田先生からもあったと思います。そういったことを総合してどう考えるかということで、それを三つ目のテーマにしたいと思います。

まず最初のテーマは、繕治をどう捉えるかということです。熊本県教育委員会の最近の報告書で初めて明らかになったと思いますが、出土した土器をすべて整理したところ、七世紀末から八世紀の初めの時期が、最も須恵器がたくさん出土する時期で、そのあとの時代、八世紀の第2四半期・第3四半期になると、土器がほとんど出土しなくなってしまいます。つまり、最も鞠智城に人がたくさんいて活躍して、おそらく土器の圧倒的部分が食器だと思いますが、その人達が活動していたというのが、ちょうど七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期で、ちょうど繕治の時期と重なると思うのです。

これをどう考えるかということですが、昔だと創建の時が最も対外関係の危機感を持って大規模なことを行ったと考えたと思います。おそらく国家的な築造だと私は思うのですが、繕治を創建と比較した形でどういう意味を持つかということが話題になると思います。ここら辺、創建の時と、繕治の時の、鞠智城の造営の違いについて、考古学的にどうかということを最初、亀田先生にお話を伺いたいのですが、いかがでしょうか。

その前に、能登原さんに土器の出土量についてお話をお伺いしましょう。七世紀末から八世紀初めの土器が明らかに出土量が多いことについてです。

それでは最初に、最近の発掘調査成果をまとめていただいたので熊本県教育委員会の能登原さんに、コメントをお願いしたいと思います。

能登原：熊本県教育委員会の能登原です。今まで先生方が述べられてきたとおり、先年の三月に作成しました、これまでの調査成果をまとめた報告書の中で、土器を再整理しましたところ、実は築造時期の土器というのは、それほど多くはありません。それで目立つのが七世紀末から八世紀の初めの時期が際立って土器の出土量が多いことです。また面白いのが、実はその後の八世紀の第2四半期、第3四半期は全くありません。一点もないというような状況がございます。幸いなことに、六九八年の繕治ということは以前から知られておりましたので、その七世紀末から八世紀初めの土器が多いことに関しては、これはおそらく繕治と関わりがあるものだろうというふうに報告書の中でも述べております。

また、その後の変遷で、土器が無くなり、そしてまた土器が出てくるというのは、おそらく鞠智城の機能の変遷と

大きく関わっているだろうと思っています。それが何なのかというのが、今後の課題になってくるのではないかというふうに考えています。

佐　藤：能登原さん、創建の時と、繕治の時との変化において、創建と繕治の間での鞠智城の機能の変化というのはいかがでしょうか。

能登原：そうですね、実際の出土遺物からはその間で創建と繕治で機能が変化したというのは、明確には言えないのかなという気はいたします。

佐　藤：あとで小西先生にも伺おうと思っているのですが、創建から繕治の間で、例えば掘立柱から礎石へという変化みたいなものは考えられるかどうか、というのはどうでしょう。いろいろな場合があるのでしょうか。

能登原：そうですね。八世紀の前半頃に掘立柱建物が、小型の礎石建ちの建物に変わるというふうには検討はしているのですが、もう少し礎石が遡る可能性もあるのかなというふうには思っています。

佐　藤：今おっしゃっていた繕治の頃に、掘立柱が小型の礎石建物になると言われたのですが、それは前提としては、そのあとの時期に、大型掘立柱建物になるということが前提でしょうか。

能登原：そのあとは礎石建物がそのまま大型化していくという流れです。

佐　藤：その年代はどれくらいですか？

能登原：そうですね、八世紀後半くらいで今とりあえずは考えております。

佐　藤：分かりました。亀田先生よろしいでしょうか。

亀田：はい。ありがとうございました。そうすると、小西先生にお伺いしたいのですが、創建期で一二棟、それから繕治期で二三棟くらい分類していますが、これがまさにその辺のということですか。

小西：創建期に比べますと、繕治期は倍増しているわけですが、例えば七号ですが、創建期にあります。七号は掘立柱ですから、二，三〇年経てば、もう耐用年数が過ぎてしまいます。そうすると、七号を解いて、八号を建てていく。そういう意味では、九号と一〇号の関係もそうですけれども、耐用年数を過ぎた建物を建て替えていくというのが、一つの繕治期の姿となります。もう一つは、二二号、二三号ですが、に礎石建物が新たに建てられています。そういう二つの要素を持って、倍増しているという、建て替え半分、それから新築半分というふうな形になります。その新築されたものは、ほとんどが礎石であるというふうな形で、この繕治期の建物を捉えています。

亀田：そういう意味で、まさに私もそういうことだろうなと思います。岡山県の鬼ノ城でも、土器は、量的にも、まさに鞠智城と同じような、鞠智城ほどは出ていませんが、動きとしてはほとんど同じ動きをしていると思います。鬼ノ城の場合、最初の段階、少なくても城壁を造るなど、当初、当然管理棟とか、建物を建てる為の管理とかそういうのもいったと思うのですが、作業小屋とかも含めて、その段階である程度できて、本格的にきちんと動くのが、やはり第4四半期、藤原宮くらいの時期なのかなと思っていますので、まさにこの辺もこちらの繕治の時期にあたります。逆に言うと、繕治以前から動いていても別に構わないのですが、少なくとも、この土器の量は、これだけの量が出るとそう考えざるを得ないと私は思っています。

佐藤：亀田先生、ついでにお伺いしたいのは、今日は完成した山城と未完成のままの山城に分けてお話があり、大変興

味深かったのですが、繕治したということは、一度完成したものを繕治しており、未完成のものはそのまま使われなくなったとお考えですか。

亀田：この辺がまさに問題になります。実際に、大野城でも、大宰府口で掘立の門から礎石の門に変わります。礎石の門に変わるのは、大宰府の場合は、八世紀の、例えば七二〇年頃とか、奈良時代になって少し後くらいだという理解をしています。そうすると、それ以前の段階、あそこに門があったのは間違いないと思いますが、それ以外の所も全部できていたのかというと、この辺は少し微妙なところです。といいますのは、大野城は今、門が九か所見つかってきております。すごく単純な話ですが、実際にどれだけの人数を使っているのかということによるかと思いますが、例えば三〇〇〇メートルの城壁を何人で造るかによって、例えば数年でできるのか、それともやはり一〇年単位くらいの話にしないといけないのかというのは出てくるのかなと思います。それを動かし方次第で、できているのか、できていないのかということになります。岡山の鬼ノ城の例で言いますと、門の柱が四角ですが、実は東門だけが丸です。これを時間差と捉えるのか、グループ差と捉えるのかで、またそこが違ってきます。それから、鬼ノ城の北門に関して言うと、礎石のその上面が、完全に削られずに岩の一部が残ったままという状況もあります。つまり、それはある面では、未完成と言われれば未完成ですが、ある面では、実はこれでいいやって、門の機能はできますので、そういうのもございます。実はまさにおっしゃったとおりで、実際にどこまでどうできていたのかというのは、すごく難しい状況です。ですから、もしかすると、この土器の数の少なさというのは、必死に城壁を造って一部はやったけれど、ほとんど城としての機能はまだまだ不十分だったということかもしれません。ただし、そうしている間に三〇

年も経てば、当然建物も傷むし、城壁も崩れるというので、繕治したのだと思います。その時に、大幅改造みたいなことも考えたのかなということも考えています。

佐藤：山城が完成したという姿をどこで認めるかというのもなかなか難しいです。一度造っても、また手弱なところは修理して、複雑にしたりしますよね、いろいろな技術を高めたり。

亀田先生は、例えば、創建の時は大野城、基肄城、金田城の場合は、憶礼福留（オクラフクル）とか、百済からの亡命将軍達の技術の下で造ったという記事がありますが、六九八年は大宰府をして繕治せしむというので、百済の直接来た技術から、例えばそれが日本化したような技術、創建と繕治の間で技術的なそういう差があるかどうかなど、そういう点はいかがでしょうか。瓦が変わってくるとか。

亀田：瓦は確かに少し大宰府の場合は変わりますね。ただ、どうでしょう。なかなか明確に、だから六六五年、六六七年のところで、渡来系の人が関与しているのは、私は少なくとも間違いないと思っています。なぜかと言うと、そもそも六六五年、六六七年のところで、例えば熊本を例にしますと、版築をするというのは、熊本の古代神社でここまで遡るのはありますか。おそらく微妙だと思います。そうすると、熊本、いわゆる肥後国で、版築を誰もやったことがないとなります。そうすると、当然、指導者およびある程度現場監督クラスの人には、そういう人がいないと、それは無理だと思います。だから実際に指導する人は、地元の人でもいいですが、憶礼福留とかそういう人ではないにしても、関係する人達が実際に設計図を描き、こういうのをしなさいと言う人がいないといけません。そうすると、おそらく地元、それから中央からも人が来て、渡来系の人がその中に少なくとも関与しているものと思われます。

これは推測の域を出ませんけれども、先程も秦人の話がありましたし、入り口の所に松尾神社ですか、あれは秦氏ですよね、おそらく。実は鬼ノ城も伽耶と関係があります。だから、まさにそういうことも含めて、渡来系の人達が動員されている可能性は、やはりあるのかなと思います。少なくとも、六六五年、六六七年、その辺のところにはそういう人がまず入っていると思います。次の段階の六九八年になると、確かに国家が関与してきます。日本の人もそういう技術がどんどん進んできますので、それを区別できるかがありますが、今できそうなものというのは、本当に瓦と礎石建物、それと古代寺院も出始めてもいい時期になります。

佐藤：小西先生、今の創建と繕治の問題について、建築のほうからご覧になって、もう一度お話を聞かせてもらえないでしょうか。

小西：やはり掘立と、それから礎石というのは、非常に技術的に隔絶したものがあります。掘立というのは何かと申しますと、要するに地面に穴を掘って、電柱を埋めるように埋めて、それで直立した一本一本の柱をつないで、建物の構造を造るわけですから、上は意外とぐらぐらでもできてしまいます。ところが、礎石建物というのは、礎石の上に柱がのっているだけですから、上をぐらぐらに造ってしまうと、本当にぐらぐらで、これは壊れてしまう。ということは、きちんとした上物、梁と柱、それから桁です。これをきちんと組まないといけません。組物と言いますが、組まないと礎石建物はできません。その技術というのは、やはりそれは渡来系のものかどうかは別として、やはり優れた技術を持った人が、どこかから来て、地元の人と一緒に造っていったという形ではないかと思います。

佐藤：繕治の時に、礎石化したというお話がありますが、もう一つ、あとの時期の再開期というところで、礎石建物が

ずいぶんまた増えて、立派になる。こちらのほうが大型だと先程の能登原さんのお話にもあったのですが、この繕治期の礎石建物と、再開期の礎石建物というのは、全体の見方としてはどうなのでしょうか。

小西：大型化するという意味では、逆に繕治期の四九号という長倉は非常に大きいですね。これはやはり先程も和泉監の正税帳のところで申しましたように、法倉という長倉が出てくるのですが、やはり律令の初期の頃の倉庫になります。動倉と書いてあり、不動倉ではありません。規模が大きいのに、動倉になります。すなわち、何かあったら、例えば飢饉があれば、そういう時は出しますよと、これを使っていいですよという倉になります。そういう意味からすると、この四九号の長倉というのもある意味、律令の精神というのでしょうか、この倉があって、これは例えば飢饉があった時には開きますよという、そういう強い律令の力みたいなものを示そうとしている倉といえるでしょう。これはに、あとの一〇世紀の初期になりますと、無くなってしまうものです。そういうふうな一つの律令の力が非常に働いているっていうことと、もう一つは、やはりまだ技術的に礎石建ちが入ってきたばっかりだから、柱間も縦と横が合っていないなど、ばらばらです。そして、再開期になると、やっと技術的に完成して、碁盤目のようなきっちりとした柱間を持つ、規格性の高い礎石建物が建ってくるという違いではないかと私は建築的には理解しています。

佐藤：四九号のような建物は、お話にあったように、長倉とも言うし、法倉とか古代の史料では出てきます。関東地方の地方官衙の遺跡でも、正倉院と言いまして、国家的な倉庫の正倉がたくさん並んでいる中でも、一棟だけ特別に立派で、瓦葺きであって、巨大な倉庫が築かれる場合があります。これは関東地方の例だと、東山道沿いに東北に出征する兵士たちに見せるかのように並んでいる場合があり、国家の威厳を示すようなあり方です。この倉を見れば、困

った時にはいずれ国家がなんとか救ってくれるであろうというように思わせる、国家的な倉庫の最たるものだと考えられます。こちらの鞠智城の場合は、ほかの倉庫ももちろんそういう性格をもちますが、四九号などは、そういう格別な倉庫ではないかなと思います。

それでは今の創建から繕治についてのお話について、荒木先生いかがでしょうか。

荒木：文献データの場合には、これがどうなるこうなるという、そこまで言えるのはそうたくさんありません。ですから、体制はこうではないかというようなところで、当たらずといえ、遠からずみたいな話に、ついなってしまいます。

この繕治期と言われた六九八年、この時期、例えばこの年号一つ取ってみても、天智朝は遣唐使を送っているのですが、天智朝を過ぎますと、天武、持統朝と遣唐使は送りません。ちょうど遣唐使が行かない時期になります。八世紀に入って、文武朝に、遣唐使を送ってみると、なんと唐だったのが、辿り着いた者が聞いてみたら、国名が変わっていました。要するに、則天武后の治世下の中国に辿

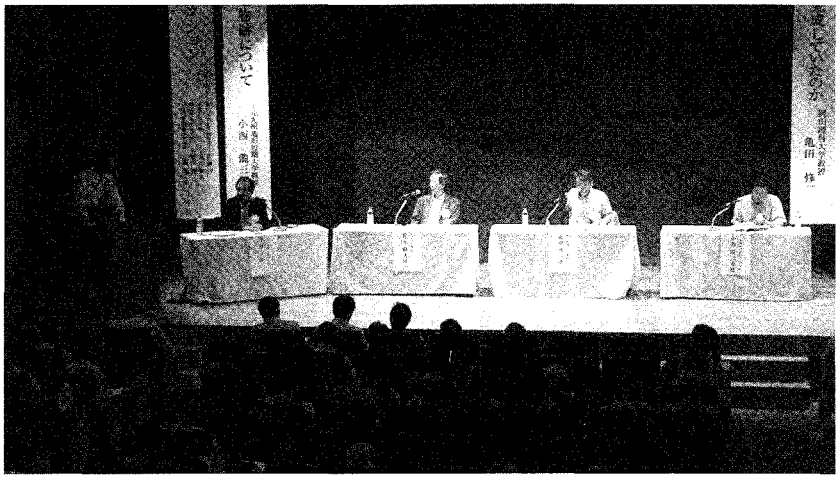

写真9　パネルディスカッション東京会場

り着いてしまったのです。そこのところを見ますと、実は山城をそれがどこまで完成したかどうかは、これは一つ一つの、朝鮮式山城であれ、神籠石系のものであれ、城の始まりがいつからで、どれくらい存続したかというのを丁寧にやるしかないと思っています。

ただ、文献からみていくと、中大兄の称制下に、おそらく相当な拍車がかかったものと思われます。では、斉明の時期に山城を造っていないのかというと、これもおそらく、どこかの山城については、基礎的な部分はやっているという可能性もないわけではございません。ですから、そこは遡る城も少しあるにしても、おそらく、かなりの数の拍車がかかったのが、一つはこの中大兄の称制下の時期になります。

そして、天武、持統の時期に遣唐使が行ってないということは、これは、現在のように行かなくてもある程度、情報が大量に入ってくるという時代ではありません。やはり現地に行って、間接であれ、情報が入る手段がない時、首脳部は、おそらく亡命百済人とか、高句麗系の者から入ってくる情報を基にしたものと思います。全くあの時期、文化が入ってこなかったっていうことは言えないことははっきりしているのですが、明らかに、情報はこの時期入っていません。それがある分、中大兄の称制下の危機感みたいなものが、ずいぶんあったと思います。その点で、東アジアの細かな状況判断というものを、天武朝、持統朝は、入ってくる情報は以前と比べて少ない中で、おそらく判断せざるを得なかった。そういう中で、かなり過分な評価をしてしまうものもあっただろうし、逆に過小評価をしてしまうこともあったものと思います。

実はこの時期行ってみて、初めて気づいたと言われている部分が都の造り方です。藤原京を理想と思って造った、

おそらく中国もそうであろうと思って行ってみたら、かなり違うというようなところがあり、藤原京をやめて、平城京に移っていく一つの理由にもなっているというようなことも一方で言われています。六九八年の状況ですが、まだ文武は二〇歳に届かない天皇で、持統が後ろで後見をするわけです。したがって、この時期の大きな判断というのは、文武朝で行けば、これ持統なのです。多くの判断は文武よりは、持統上皇、持統太上天皇におそらくあったというふうに見てよろしいのではないかなと思います。

白村江で勝利した側の新羅は、その前の時代なのですが、二人の女帝を出す時代でした。善徳、真徳という二人の女帝を出しましたが、善徳の段階で、内乱が起きます。中国からすれば、女帝の国、女性が統治する国と言って、やはり馬鹿にしたのですね。そうしたなか、奇妙な提案を中国側がするわけですが、新羅は、それを断ります。つまり女帝という統治の仕方は一ランク低い、ないしは、まだ未成熟な国がやるというふうに言っていた中国が、実はその時期、則天武后が統治していたからです。歴史の皮肉と言えば、皮肉なのですが、そういう時期であります。

その時期、日本では持統ですから、偶然です。持統が、正式に即位したのと、則天武后が即位したのが同じ年ですが、ただし中国へは行っていません。行ったら何か言われるかも知れないという思いがあり、文明国中国を遠くで見ていた可能性は十分あります。ところが、大宝年間に則天武后に謁見して戻ってきた使節団が、「びっくりしたことです、相手も女帝でしたよ。」と、おそらく帰朝報告をしたものと思われます。そのようなわけで、当時の国際関係から見た時の、この時期というのは、天武、持統の、おそらく彼ら自身も、見聞きしたその戦争体験というものが、それなりに生きていた。であるが故の所産というふうに見ていったらいかがかな、と思っています。

佐藤：荒木先生は、古代の女性天皇に関するご著書も最近出されておりますが、白村江後の古代山城の築城が、いわば中大兄王の称制下、大王代行の下での事業だったというお話だったのですが、六九八年の繕治というのも国家的な事業でしょう。

荒木：ええ、そうだと私は思います。

佐藤：ちょうどその時期に、藤原宮期という言い方もありますが、鞠智城で最も土器が大量に出土して、活発に動いているという時期に当たるということです。築城と同時に、この繕治の時期というのも、鞠智城にとっては大変重要な注目すべき時代だということが見えてきたと思います。

もうすでに、律令国家にとっての意味という二番目のテーマにもう入っていただいていると思いますけれども、考古学的な方ではいかがでしょうか。山城が未完成なのも含めて、繕治される山城が、数限られているわけですよね。今日お話があったように、未完成のものが多い中で、一部完成したもの、あるいは完成をどこに基準を置くかちょっと難しいですが、少なくとも繕治して整えたもの、そして一〇世紀くらいまで鞠智城のように続くものと早く命を失ってしまうもの、そのあたりの区別というのは、どういうことで出てくるということになりましょうか。城の造営主体という課題もあるのかも知れませんが。

亀田：先程申し上げた、以前から言われている神籠石系山城と言っているものが、記録に出ない理由は何なのかというのは、いろいろな方がやはりおっしゃっています。例えば、『日本書紀』を編纂する時期に、もう機能が完全に停止して忘れられてしまっていたからだ、という話もあるし、たまたまという話もあるのかなと思っています。

私がよく言っていることは、もし修繕されなかったら、文献に登場しないということで、鞠智城も神籠石系山城ですよね、今の定義で言うと。お分かりでしょうか。つまり、文献というのは、文献も当然書かれていないことはたくさんあります実は鬼ノ城も、六六七年くらいに一緒に造られていても良かったのかなというふうに個人的には思っています。

それから、これは以前から言われていることですが、讃岐の屋嶋城に関しては、郡名が入っています。これも以前から、出宮さんが言っていますが、讃岐にもう一箇所お城があるから、わざわざ郡名を書いたのではないかと言われています。それが、実は讃岐の城山、つまり国府の真後ろにあるお城であるのではないかという話もあります。やはり、文字資料に関して言うと、ないからどうの、あるからどうのと、当然あるのは当然ですけれど、ないというのもやはりそれだけの意味も含めてあるのかなと思います。

ただ、そういう中で行きつくところは、少なくともできあがっている城は、やはり重要なお城なのだろうと思います。

そういう認識ができるのかなというのは、実は今日申し上げたかった一つのことです。逆に言うと、完成しなかったと考えられるもの、よく分からないのはいくつか当然ありますが、明らかにもうできてないというのは、もし神籠石系のものというのが古いものであるならば、前から言われていますように、朝鮮式山城を造り始める段階に、神籠石系のものはまだきちんとした技術者、指導者がいなくて造り始めて未熟だったから、そこで止めたのだという意見があります。

それからもう一つは、新しい時代に絡むのですが、まさに天武、持統くらいのところになってきて、実は総領とか、大宰とかいう言葉があります。実は古代山城と言っているものが、対朝鮮半島のためではなくて、地域支配のために造り始めたのではないかという意見も出ています。先程、荒木先生が言われた、まさに天武、持統という時期がちょうど古代国家が各地域を押さえていくということにつながります。例えば、これで行きますと、肥後国の文献上の初見は六九六年ですが、まさに地域が前後とかに分けられる時期っていうのが、まさにこのあたりの時期です。まさに、そのあたりの時期に古代山城を造って、地域を支配しようとしたのではないか、とおっしゃっている方もいます。ただし、このあとすぐに出てきますように、八世紀の初頭くらいに、もうお城造るのをやめましょうとか、管理するのをやめましょうという話が出てきますので、だから止まったとおっしゃる方も当然いるわけです。だから、両方実は説明ができるので、なんとも言い難いのですが、ただやはり私は、拠点の所はまず造っているのではないかというのはありなのかなと思います。それで、のちにやはり管理もするということも含めて拠点だったからというのはあるのかなと思います。

ですから一つ言えるのは、対馬の金田城がその後よく分からないというのは、もしかしたら対馬の位置づけが、国家的な意味でも変わってきたのかなという気はいたします。やはりまず、大宰府　とかのほうをまずして、というような意味があったのかなという気もいたします。

そういう意味で、古代山城がある程度できあがっていただろうと思われる所というのはやはりその地域が中央にとって、大和にとっても大事だったということも示しているのかなという気はします。

佐　藤：金田城も六六七年頃に築きながら、繕治の時の記事には出てこないわけですね、逆に。

亀　田：はい。そして実際礎石建物が見つかってない、瓦がでないという話というのは、やはり少し気になります。

佐　藤：ある意味では、全部がそろっている古代山城の中で、鞠智城は一つの大きな基準の城になると言っていいでしょうか。

小西先生、律令国家の形成と、造営主体について、今日のご講演で九世紀のことまでお触れになったのですが、これまでの話を踏まえて、いかがでしょうか。

小　西：そうですね、阿志岐城というお城がありまして、これは大野城のすぐ真下にあると言ってもいいお城ですけれど、大宰府の防衛網に比べ少し後でできたのかなと感じています。特に目的がはっきりしていて、大宰府から田川を抜けて、いわば瀬戸内海へ抜ける田川道というのがあり、城の正面がその道のほうを睨んでいます。決して対外的な方向を睨んでいるわけではないお城です。そして、睨んでいる方だけはきっちりと造るのですが、睨んでない方は、何もないというのでしょうか、ただの山の崖線だけという造り方になっています。ということで、要するに対外的な防衛網として造った朝鮮式山城というものと、その神籠石の城、私は阿志岐城のことだけしか申しませんが、目的が少しずつ違って造られていたと考えています。そのため、例えばあとで編纂した『日本書紀』に載らなかったと捉えております。

建築的な話でしますと、いわば八世紀の末、私が言う再建期の前には、やはり唐の安禄山の乱とかですね、それから藤原仲麻呂が新羅出兵を試みるなど、結局出兵しなかったのですが、そういう緊張状態が八世紀の後半にありまし

て、それを受けた形で鞠智城の修理が行なわれたのではないかなと、再開期というのはそういうふうに生まれたのではないかなと考えています。

佐藤：八世紀後半、藤原仲麻呂の政権の時代に、唐の国が、安禄山・史思明の乱で壊滅状態になり、東アジアの大動乱の時代がまた出現しそうになった時に、北東アジアでも渤海という北の国が朝鮮半島の新羅の国を攻めようかという時に、日本と挟み撃ちにしようという話もあるくらいであり、そういった情報も踏まえて、藤原仲麻呂は新羅を攻撃する計画を立てました。これは『続日本紀』に書かれていて、間違いないと思います。その際に、ちょうど大宰大弐として吉備真備が大宰府に来ていて、怡土城を築城したとか、行軍式という軍隊の規範を作ったとか、いろいろな話があるわけです。その時代も、八世紀後半でありますが、北部九州はだいぶん緊張したと思います。それから九世紀代も、実は新羅の海賊が北九州まで攻めてくるということもあり、新羅との緊張関係が国家的な課題になった時もありました。そういう東アジアとの動きの中で、鞠智城の変遷も理解する必要があると思います。

最後に、東アジアとの関係の中での鞠智城という話をしたいと思います。これは造営の時の百済系の技術の問題があります。あるいは亀田先生の瓦の話もありました。また、百済で造られたと言われる小金銅仏の立像も出土しておりますし、朝鮮半島の山城に見られる八角形の建物とか、貯水池があるといったこともあり、城の造営に渡来人がどう関係したかを明らかにしていくことで、鞠智城のそれぞれの時代における歴史的な意義も分かると思うのです。そういった東アジアの中における鞠智城の位置づけ、あるいは創建期と繕治期で、それがどう変わっていくかということも踏まえて、まず亀田先生いかがでしょうか。

亀田：先程も言いましたように、創建と繕治の区別はかなり難しいものです。百済の仏像や「秦人」の木簡、それから築城時における版築。あと個々の唐居敷の穴を加工する技術も新しい技術だと思います。そういう技術的なものと、城の縄張りがあります。どういうふうに造るのかということですが、これは当然日本にはないものでしたので、当然そういうのは造り始めの時にあろうかと思います。

あと瓦に関しましては、意見が分かれるところがありまして、百済的なものと見るのか実は新羅という可能性も全く捨てきれないわけではないというのが、現実であります。それは、六六五年か六六七年か知りませんが、その時と見るのか、もう一つは、六九八年の段階にあの瓦を使っているのかというのも、実は検討の余地があります。特に細かな話ですが、瓦の造りで、瓦の丸いところの上に、これをそのまま被せるだけの技法というのは、実は今のところ日本ではほとんどありません。その技法は、百済と新羅の微妙なところに出てきますので、いずれにしても、そういう技術は新しく朝鮮半島系のものと理解していいのかなと思っています。あと強いて言いますと、玉名郡の立

写真10　パネルディスカッション東京会場

願寺というお寺さんがあるのですが、ここの瓦は実は他地域であまり見ないもので、もしかしたら百済かなという造り方になります。技法面ではそういうのもありますので。実は菊池川エリアというのは、もともと朝鮮半島との関係も、ご存知のようにたくさんありますので、そういう背景というのはもともとある地域だろうなと思っています。

それで、本筋から外れるのですが、私は鞠智城ができるのは、単に大宰府の後背という感じだけではなく、やはり有明海が一つの大きな表玄関だと思っています。そういうのが先程の菊池川における朝鮮系の資料の問題もそうですし、それからもっと南のほうの話もそうですが、やはり熊本のエリアというのが、福岡から見れば当然後ろのほうですが、単に玄界灘だけではなくて、有明海からという南ルートというのもやはりあってというのが、鞠智城の築城以前にもあり、古くから朝鮮半島と関わった人達がこの地域にいてというのとも結び付くのかなとは思っています。

佐藤：こちらの東京国立博物館の平成館には、菊池川流域の江田船山古墳から出土した国宝の銘文大刀をはじめとする遺物が展示してあるわけで、熊本県と縁のある所だと思います。江田船山古墳の出土遺物も百済系の遺物で、そのままおそらく大王経由ではなくて、熊本県に来ているといっていいと思います。有明海が外に向かって開く日本の一つの大きな玄関だったということを含めて考える必要があると思います。

小西先生いかがでしょうか。

小西：最後に申し上げたいのは、鞠智城と大野城、金田城を含めた朝鮮式山城というのは、同じ画期を持っています。その画期というのが、要するに日本の対外的な緊張と非常に連動したものとなります。大野城もそうですし、鞠智城

もそうだということがはっきりしていて、やはり古代山城の誕生、それからその変容というのは、そういう対外的な大きな画期と連動しているのだということを最後に言いたいです。

佐藤：荒木先生、東アジアの中の鞠智城ということについてお話を伺えますか。

荒木：私も有明海を一方で見据えながらの鞠智城という位置づけは、これは相当大きな意味を持つのではないかなと思います。おそらく時代的にも少し細かく区切って、今後も突き詰めていけば、もう少し違う角度からの鞠智城の位置づけが出てくるのではないかなと思います。

ご承知かも知れませんが、八世紀、九世紀、そして一〇世紀になりますと、かつては、鴻臚館（こうろかん）が大陸半島への公式の窓口というふうに言われ、もっぱらそこに目が行きがちだったのですが、そのこと自体間違いないのですが、実はそこでの交易は、ほんの一部です。もう少し沖合でやる交易は、何も博多に限らないというようなことも、当然これは見ておかないといけないでしょうし、既に鈴木先生がご説明なさっていますが、張保皐（ちょうほうこう）という、これもまた新羅の、もう中国でも軍人経験があり、新羅王朝の所にお妃を出すくらいの、そして、一大海商でもある方がいました。こういう個人が大きなネットワークを張った交易網を持っていました。その一角に、北九州が確実にリンクしているわけです。文室宮田麻呂事件という、ほんの一端が出てくるのですが、根っこは実は、おそらく中国、朝鮮を含む、下手をすれば、おそらく東南アジアの方にまで及ぶ一大交易の中に、日本もまたリンクしている部分があるという点も見据えてやっていけば、おそらく当初の性格は対外戦争の中で、もし来たのであればという専守防衛みたいなところの性格の施設が時期とともにあり、多少なりとも使わない時期があったのではないかと思います。そして後にはお

そらく菊池郡の郡倉としての機能があったものと思われます。それでも単なる一地方の郡倉ではなくて、これは鳴動という予兆が国に乗っかり、菊池郡で鳴るということが、国家的な危機、王権の危機というものを、訴える一つのものに機能しているということの意味は、これは尊重しなければならないですし、確実に、都に通じる報知器を持っているわけです。その機能がまだ動いているということの意味は大きいでしょうし、そういう機能が消えていった時に、まさに今度は地域の中にどう生き、どう生きながらえていくのかという、そういう性格の遺跡ではないかなと思います。外もそうでしょうし、外との関係にもストレートに影響していた時期から、やや間接的な動きになってくるのではないかなと思いますが、地域を見る視点というのが、国内だけでなく当然のこととして外にも目を向けた鞠智城の研究というのが、今後も是非盛んになるように期待したいと思います。

佐藤：どうもありがとうございました。鞠智城をテーマにする研究として、いろいろな視角から、さまざまな研究がまだまだこれからもできるということが、お分かりいただけたのではないかと思います。今日は、鞠智城の創建期と繕治期とに焦点を当てて議論していただいたわけですが、熊本県では、鞠智城について大変熱心に調査・研究を進めていただいており、さらに成果が上がってくると思いますので、ご注目いただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。